

絲綢之路

シルクロード

S I L K R O A D

2011-新春

No.65

●表紙の画および題字は、
平山郁夫画伯のご厚意により
ご提供いただいたものです。



「安芸路」厳島神社本社本殿 1993年



【葡萄唐草模様について】

古代、ペルシャ、コーカサス生まれの葡萄が蔓草と一つになり、西へ、東へ、シルクロードを経て東西の文化を彩る文様となりました。私どもの財団ではシルクロードを中心に、世界の文化に寄与できればとこの葡萄唐草文様をシンボルマークにいたしました。

●シンボルマークデザイン：
東京芸術大学 吉田左源二名誉教授

公益財団法人

文化財保護・芸術研究助成財団

FOUNDATION FOR CULTURAL HERITAGE AND ART RESEARCH

黄 山 (中華人民共和国)



ユネスコ世界遺産(文化遺産)シリーズ

©UNESCO

安徽省にある高くそびえる多くの峰々。豊かな自然とその景観に育まれた文化がみごとに融合し、複合遺産として登録されている。黄山には一〇〇種を超える植物、貴重な動物が生息しているといわれており、霧にまつまれることが多い峰々は詩に詠まれ、水墨画や山水画に描かれた。

(一九九〇年に複合遺産として登録)

(社)日本ユネスコ協会連盟

年頭に思ひこみ……

新年明けましておめでとうございます。

昨年、心ときめく思いをした事の一つに小惑星探査機「はやぶさ」の快挙がありました。幾多のトラブルに見舞われながらも、七年間、六十億キロの宇宙の旅を終え、自らは大気圏突入の際に燃え尽きたものの「はやぶさ」は、耐熱カプセルの中に小惑星「イトカワ」で採取した試料を地球に持ち帰りました。

もちろん、この快挙を支えたのは日本の宇宙開発陣の努力と技術力があつたわけですが、それにしては月よりもはるか遠い天体に着陸し、試料を持ち帰るという人類史上初の偉業にはいかなる賛辞がふさわしいか迷いました。

夜空の星々は雄弁な語り部のように思われます。俳聖・松尾芭蕉は「おくのほそ道」の中で越後出雲崎で有名なこの一句を詠んでいます。

「荒海や 佐渡によこたふ 天の河」

我が生まれ故郷、佐渡島の夜空は、芭蕉をして一句詠ませたように美しく、私は少年の頃、この星空の彼方には何があるのだろうと自問をくりかえしておりました。

今、宇宙に関する私たちの知識は飛躍的に増

加しています。私たちが目にする星の光の中には地球誕生以前のももあり、宇宙は誠に神秘にみちた過去を見せてくれます。

過去との邂逅となると、文化財は第一級のその時代の証言者です。私たちは文化財を通じて自分たちの祖先が生きた時代を知ることができ、ここに文化財を守る大きな意義があります。亡き平山郁夫先生が提唱されていた「文化財赤十字構想」の精神にのっとり、二〇〇六年から始まった日・中・韓三カ国共同プロジェクトである「サムスン・シルクロード文化財保護・フェローシップ」すなわち「日中韓共同シルクロード沿線文化財保護修復技術者育成プログラム」は、当初の予定通り五年間の研修期間を無事終了し、保存・修復の指導者百余名を送り出すことができました。

環境も立場も全く異なる日中韓の関係者が多くの困難を乗り越え、互いに知識を、技術を、資金を出し合い、人材育成という共通のゴールにたどり着けたことは高く評価すべきであると思います。このプロジェクトの終了にあたり、学術シンポジウムと閉会式が十二月十五日から十七日まで北京で開かれ、成功裡に終えることができましたことを御報告申しあげます。



理事長
宮田 亮平
みやた りょうへい

文化財は人類が永年にわたって築いてきた知的活動の一端を具現化したものです。これはまた一朝にしてできたものではありません。文化財を守るということは、過去、現在、未来へとつながる知的、精神的リレーであると私は思います。私どもは、国の内外を問わず貴重な文化財を守るための活動に邁進しておりますが、我が国の美術・音楽等、芸術のさらなる発展のためにも尽力いたしてまいります。

日本は資源小国です。このハンディを克服し、我が国を世界の先進諸国と伍する国へと導いていったエネルギーは、一に二にも国民の努力であったと思います。昨今の経済不況は厳しいものがありますが、こういった時こそ過去に学び、知恵を出し合い、光明を求める頑張りが必要でしょう。

加うるに私たちは、世界に冠たる日本の文化、芸術を育てていく義務があると考えます。文化、芸術を通しての世界との交流は、それはまた世界平和への一助にもなる力であると信じます。そのためにも私ども財団の職員一同、一丸となって取り組んでまいります。皆さまのより一層の御理解、御支援を心よりお願い申し上げます。

パブリック・アートのさらなる発展を 芸術・文化の高さを誇れる日本へ



(公財)日本交通文化協会
理事長
(株)ぐるなび
代表取締役会長・創業者
滝久雄
(たきひさお)

パブリック・アートとの四十年

私が理事長を務めている公益財団法人日本交通文化協会は、一九四八年の設立以来、我が国のパブリック・アートの振興を目指して積極的な取り組みを展開してきました。主な事業は、鉄道駅に代表される公共の空間における壁画等パブリック・アート作品の制作です。その制作点数は、二〇一〇年末時点ですでに四百六十点を超えました。文化財保護・芸術研究助成財団の前理事長故平山郁夫先生、そして現理事長宮田亮平先生にもいくつかの作品を手がけていただくなど、我が国を代表する芸術家の方々と共に制作し、全国の主要駅に展開した作品の数々は、我が国のパブリック・アートのまさに原点と位置づけることができると自負しています。

私自身がパブリック・アートに取り組むようになるきっかけはいくつかありました。ベンチャーを決意してまもなく、駅を自分の事業の夢を実現するフィールド

ドに選んだこともその一つです。今から四十年ほど前の話です。私は、日本の鉄道網がとても素晴らしいものであること、都市の駅のネットワークが世界のどの都市に比べても格段に発達していることに気づきました。そして、駅を利用者にとっての情報伝達メディアに変えようと決意しました。

しかし、当時の駅は、通勤や通学、買い物などでただ通過するだけの場所でした。人々が集まるにはけっしてきれいな場所とはいえず、憩いを与える要素もほとんどありませんでした。駅を美化して、心地よいスペースにしなければ、そこに人々が滞留することはない。そう思ったときに注目したのがパブリック・アートの存在だったのです。

そのような思いでいるときに、貴重な経験ができました。一九七二年に日本交通文化協会が、東京駅地下中央通路大階段正面に日本で初めてとなる公共ステンドグラス「天地創造」(福沢一郎作)を設置することになり、私はその事業にかかわることができたのです。完成した作品

を前に、パブリック・アートには駅に新しい空間を創り出すポテンシャルがたしかにあると、その思いを強く実感したものでした。

国際瀧富士美術賞

日本交通文化協会では、環境芸術の振興と人材育成を目的とした奨学金制度として「瀧富士美術賞」(現在は国際瀧富士美術賞)を一九八〇年に創設、今日まで三十年以上にわたって続けています。

その内容は、美大の最終学年の学生を対象に卒業制作に当てる費用として奨学金を給付するというもの。給付対象となる美大は年々増え、現在、国内は十二大学、海外はアジア、米国、欧州の七大学になっていきます。

年に一回の授賞式には、学生だけでなくその学生が所属する美大の先生たちにも出席していただくのが慣例で、式の後に開くパーティは美術大学関係者のまさに国際交流の場となっています。

このパーティを振り返ると、出会いの

思い出があふれています。なかでも鮮烈な印象として記憶に残るのが、一九九〇年の開催です。「今、ここに私がいることにこそ大きな意味がある」そうスピーチした当時のベルリン美術大学のバルドゥア・シェーンフェルダー教授は忘れられない人です。このパーティの開催は一九九〇年八月二十八日で、場所は東京・丸の内。東西ドイツが一つのドイツに戻ったのは同年十月のことで、シェーンフェルダー教授は東ドイツ国民としての来日でした。

当時、シェーンフェルダー教授をご招待しようと思ったのは、芸術、文化には国境を越えて交流できる力があると信じていたから。静かに語られた教授の言葉に、その思いをますます深くしたことを今も鮮明に思い出します。

クレアーレ熱海ゆがわら工房

静岡県熱海市にある「クレアーレ熱海ゆがわら工房」は、日本交通文化協会と



「クレアーレ熱海ゆがわら工房」(静岡県熱海市)におけるステンドグラスの制作

株式会社NKBのパブリック・アート本部が連携して推進する文化・芸術的環境創出活動の制作を担う工房です。ステンドグラス、陶板レリーフ、モザイク、彫刻・モニュメント等の制作を行っています。また、とくに陶板レリーフは世界のトップクラスの技術を保有しています。

それは、窯で陶板を焼く過程で五〇〇〇種類の色を作り出す技術。五〇〇〇色の再現はステンドグラスのそれに匹敵するもの。つまり、陶板レリーフによってステンドグラスと同様の表現が可能になるのです。

私たちは、このクレアーレ熱海ゆがわら工房の設備を、広く芸術界の役に立てるよう新しい試みも始めています。その一つが、美大への開放。

昨年は、工房にて、東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻壁画研究分野壁画

研究室の学生のブレ壁画実習ゼミが実施されました。公共の場に設置される大型のステンドグラスと陶板レリーフを制作する工房を見学、さらに実技への取り組みを通じ、学生たちは規模の大きさや技術を体感するとともに、パブリック・アートの意義も実感。「一人で全てを行う個人の作品とは違い、人とコミュニケーションをとりながら仕上げていくパブリック・アートの可能性を探りたい」という学生の感想が聞かれたことは本場にうれしいことでした。

パーセント・フォー・アーツ

いわゆる「失われた十年」以降の閉塞感を突き破り、日本が再び元気な国になるためには経済や社会構造の再構築等はもちろんですが、芸術・文化の一層の振

興も欠かせないテーマであると私は考えます。そして、経済だけでなく芸術・文化の面でも世界の各国から尊敬される日本であり、日本人でありたいと思います。

そのためには、私は「パーセント・フォー・アーツ」の一刻も早い実現を願っています。公共事業費のパーセントを芸術・文化に支出する「パーセント・フォー・アーツ」というシステムは、欧米の多くの国や市で第二次世界大戦後に導入されています。

日本の国家予算に占める公共事業費のパーセントが芸術、文化のために活かされるなら、日本の一流の画家も彫刻家も、ほとんどの人が自分の本業である創作活動に打ち込め、もっと多くの作品を生み出せることでしょう。それらの作品がパブリック・アートとして公共の空間にあふれる我が日本。そのような環境が近い将来に実現することを願い、ハーバート・リードが『芸術の意味』の頁に残した言葉の重さを改めて噛み締めたいと思います。

今われわれに欠けているのは芸術家ではない。大衆である。芸術に意識を持つ大衆ではない。無意識的に芸術的な大衆である。

略歴
一九四〇年…東京生まれ
一九八五年…株式会社NKB
代表取締役社長就任
一九九三年…公益財団法人日本交通文化協会 理事長就任
第二〇一〇年…株式会社ぐるなび
代表取締役会長就任



「第31期国際瀧富士美術賞授賞式」の様

〓平成三十一年の完成が待ち遠しい〓

国宝薬師寺東塔の解体修理



【略歴】

一九二八年東京都生まれ。日本建築史専攻。元奈良国立文化財研究所長
現在、国宝薬師寺東塔保存修理事業専門委員会委員長

鈴木 嘉吉
すずき かきち



薬師寺東塔の全貌

いよいよ始まった東塔解体修理

今年からいよいよ国宝薬師寺東塔の解体修理工事が始まる。完成予定は平成三十一年という長丁場である。昨年奈良は平城京遷都一三〇〇年祭が行われて賑わった。主会場の平城宮跡では大極殿が復元さ

のため今は鉄バンドで絞めつけ、二重目の位置で同様に鉄バンドと鎖で建物本体から吊り下げる応急手当てを施している。大きな地震で心柱が足下から崩れることが危惧されるからである。

大きく張り上げた軒を支える組物や裳階の下の腰組も上部荷重に堪えきれずに変形した箇所が多く見られ、肘木と斗の接面が開いてしまっている。前方へ差し出す力肘木がどういうわけか柱筋の肘木と下木で組合わされているため、仕口部分で割裂して垂下した箇所も少なくない。このような部材自体の破損はかなり進行していて、一部では穴明き状態のものもある。こうしたことから今回建物を全部解体し、基礎もやり直す大規模な修理工事を行なうこととなった。東塔は明治三〇（一八九七）〓三十一年に古社寺保存法による大修理が実施されている。しかしこの修理はとも初重や基礎石にはほとんど手を加えない不徹底な工事であったらしい。その意味で今回の解体修理は創建後初めての根本修理といつてよいのである。

移築か新築か 説明されるか東塔の謎

唐招提寺金堂の時もそうであったが、こうした根



相輪の銘は何を語るか

れた効果もあって、入場者数が当初予定していた二五〇万人を越えて三六三万人だったという。関連して県内の各社寺でそれぞれ「秘宝・秘仏特別開帳」が行われたが、薬師寺では国宝吉祥天画像などの特別展示のほか、初めての試みとして四月八日から十月三十一日の間、東塔初重内部を公開した。修理工

本修理に伴って新しい発見が期待される。文化財関係者にとって修理は千載一遇の好機なのである。修理に伴う調査によって知りたい最大の関心事は東塔が移築か新築かの決着である。薬師寺は天武九年（六八〇）に藤原京での創建が発願され、文武二年（六九八）にはほぼ完成したが、平城京遷都に伴って養老二年（七一八）現在地に移された。この時、新寺の伽藍は旧寺の規模・配置をそっくり踏襲したことが、藤原京に残る本薬師寺の遺跡から判る。本薬師寺には金堂や東西両塔の礎石と土壇が残っていて、近年の発掘調査では各建物とも裳階があり、平城薬師寺と同様な姿であったことも判明している。

もう一つ重要なのは東塔が他の天平時代の建築と比べて古武な点である。柱はわずかな胴膨らみをもつし、組物は唐招提寺金堂のように軒支輪をつけて整然とした納まりになる以前の素朴な形式である。こうしたことから「扶桑略記」等には天平二年（七三〇）に東塔を建立したと書いてあるが、それは新築ではなく藤原京から移築したものだという学説が明治三十六年（一九〇三）に発表され、以来移築か新築かの議論が続いているのである。

唐招提寺金堂では年輪年代調査で三本の垂木の伐採年が七八一年に一致し、他の部材の年輪はそれより古いことから、建築年代をほぼ押さえることができた。金堂がいつ建てられたのか。これも長い間の学界の論争問題であったが一応決着したのである。東塔の場合も部材の痕跡調査や年輪年代調査で結論が出るものと思われる。相輪に寺の創建を物語る銘が刻まれているが、詳細な調査をすればその成立事情も解明できるかもしれない。

東塔復元に向けての課題

解体修理に伴う調査のもう一つの大きな課題は創建当初の原形の復元である。実は西塔を再建する際には東塔を約一年間に亘

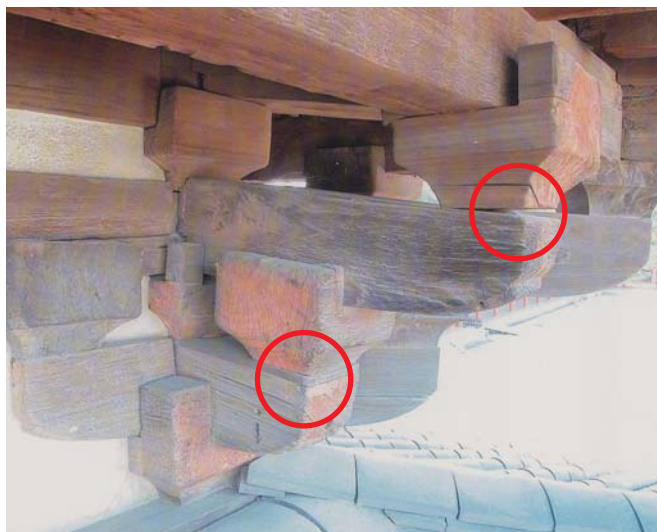


内部が空洞化している心柱(中央)

事前の現状を見てもらおうというわけで、創建後一八〇年を経た今日でも、天井の格間や支輪にはかなりの鮮やかな彩色模様が残っているのを見て感嘆の声をあげる人が多く、好評であった。

奇跡的に創建当初の寺院建築の 美を残している東塔

薬師寺東塔は二度に亘る伽藍の大火災に遭いながらも奇跡的に残って一棟だけ存続する創建当初の建築である。三重塔の各重に裳階をつけ屋根が六層に重なる特異な形式で、交互に並ぶ大小の屋根が造りだすリズム感が「凍れる音楽」と称えられている。日本建築の中で最も美しい建物の一つに挙げる人が多い。その美しい建築も近づいてよく見ると満身創痍の状態である。太い柱が立つ初重の礎石は全体に沈下し、その高低差は最大の箇所では十五センチに及んでいる。中央に立つ心柱は内部が腐って空洞になっており、根本からファイバースコープを挿し込んで調べると、初重天井近くまで空洞が達している。そ



接解面が開いてしまった肘木と斗(〇印)

って綿密な調査を行い、その創建時の形式を探求して復興した。西塔では裳階の外周が連子窓になっていた、三重目の軒の出が大きく、屋根勾配が緩くなっていたりするのはそのためである。特に三重目の軒は東塔の場合、江戸時代に切り縮めた記録があり、実際にもやや寸詰りの感がある。西塔復興の時には建物が立ったままの調査であったが、今度解体すれば部材の痕跡や寸法も詳細に把握でき、創建時の姿を正確に復元することが可能となる。西塔の三重目の軒の出寸法は初重・二重との比例関係で推定したが、今度は古材等の発見で本当の寸法・形状が判ることを期待している。できればそれらを復元して東塔をより美しくしたいと思うが、それは修理工事のこれからの検討課題とするほかない。

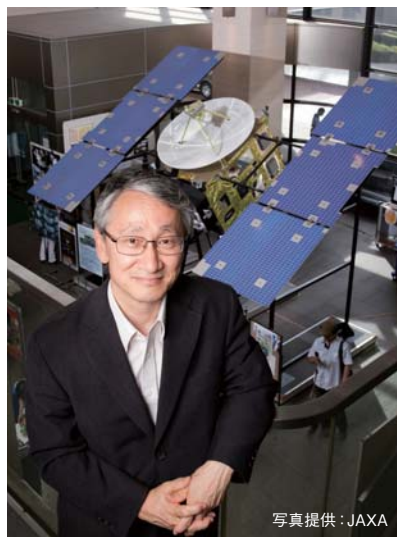
解体修理はまず建物をスッポリ覆う素屋根の建設から始まり、今年の六月頃には着工する予定となっている。そうすると約一〇年間は東塔を見ることは出来ないが、逆に解体中の木組みや組物などに間近に接する絶好の機会であり、工事中には定期的に見学会を開く予定である。そんな時にはできるだけ多くの人に古代建築の素晴らしさを実感して頂きたいと考えている。

「はやぶさ」―人類初の小惑星イトカワへの往復飛行の挑戦

二〇〇三年に打ち上げられた「はやぶさ」は、地球引力圏外の天体へ着陸し、人類初の往復の宇宙飛行を達成しました。

「はやぶさ」は、イオンエンジンでの惑星間の航行や、地球スウィングバイを併用して加速する新型の飛行技法、光学観測情報をもとにした自律的な航法・誘導機能、そして、試料回収カプセルを惑星間を飛行する軌道から直接に地球大気へ再突入させるなどの新技術を満載した大きな挑戦でした。我が国の惑星探査分野は、世界レベルに遅れをとっていました。この「はやぶさ」はそれを一挙に挽回して、なお余りあるほどの成果を狙う思い切った計画でした。

「はやぶさ」は、二〇〇五年九月に小惑星イトカワへ到着し、近傍観測を行った後、同年十一月に二回にわたって、表面への降下・着陸を果たし、試料採取を試みました。



写真提供：JAXA

そして、二〇一〇年六月十三日、七年間六十億キロの往復の宇宙飛行を終え、オーストラリアのウーメラ砂漠地帯に帰還し、試料回収カプセルを無事降下させ、回収することにも成功しました。

その飛行は、とくに離着陸時や帰路で数々のトラブルに遭遇しました。とくに、探査機から燃料ガスが漏洩し姿勢を崩して全電力を喪失し、七週間にわたって通信を途絶したことや、のこり半年を残して全イオンエンジンが寿命を迎え、飛翔計画全体は致命的な状況に陥り危機的な状況に見舞われました。しかし、「はやぶさ」プロジェクトメンバーは、「はやぶさ」のゴールは地球なのだ」という目的を高いレベルで共有し、モチベーションを維持して、これらの故障や困難を克服し、今回の地球帰還の成功へとつなげました。

その後、二〇一〇年十一月には、回収されたカプセルからイトカワ起源の試料が確認され、世界ではじめての小惑星サンプルリタンの成功が達成されることとなりました。

略歴

川口 淳一郎
(かわぐち じゅんいちろう)

1983年：東京大学大学院工学系研究科航空学専攻博士課程修了
2000年：旧文部省宇宙科学研究所教授
2011年現在：宇宙航空研究開発機構（JAXA）宇宙科学研究所宇宙航行システム研究系教授 月・惑星探査プログラムグループはやぶさプロジェクトチームプロジェクトマネージャ

装演分野における伝統の継承と発展について

回収されたカプセルは全国各地で展示されています。三億キロかなたの地球圏外天体に着陸し、七年間六十億キロの往復飛行の末帰還したカプセルは、けっしてコンピュータで描かれた仮想のCGではなく、実体のある本物です。それがもつ、我が国

の科学技術の水準を世界に発信する、アポロのカプセルにも引けをとらない証拠でもあります。この成果を活かして、我が国が将来にむかって自信と希望をもてるよう、次世代を担う若者が新たな挑戦を続けていく契機とならんことを願います。

といった伝統材料や道具が必要不可欠なのです。このような装演分野に特化した伝統材料や道具類は市場の変化によってその需要が著しく低下し、一般的な表具師ですら使わないものになりつつあります。こうした状況を鑑み、近年は装演分野に関わるあらゆる材料や技術に関しても技術の継承を検討する重要性が取り沙汰され、伝統の灯を消すことがないように社会の仕組みを考えるという活動が始まりつつあります。しかし、伝統的な世界や技術に携われば携わる程、仕組み作りだけでは伝統を継承し、発展させることができないということを痛感しております。

伝統の真の意味と重要性を理解できる優れた見識、伝統的なものが大切に、代替えでは納得できないという技術に関わる者のこだわりがなければ、本物の伝統は守れないのではないのでしょうか。正に伝統技術の継承と発展には、それに様々な形で関係を

持つ人達の見識と

伝統に対する真摯

な態度、そして、

それに立脚する社

会活動と仕組みづ

くりが一体となる

ことが重要な条件

なのです。

略歴



岡 泰央
(おか やすひろ)

1996年：関西学院大学大学院文学研究科前期課程修了
1997年～1999年：米国スミソニアン研究機構フリーア美術館学芸部リサーチアシスタント
2007年：株式会社 岡墨光堂 代表取締役就任
2008年：一般社団法人国宝修理装演師連盟常務理事 一般社団法人文化財保存修復学会理事

美しき楽の音を世界にむけて

二〇〇七年四月、平山郁夫先生のご尽力と貴財団のご援助により、東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校の生徒たちのオーケストラ演奏会がパリのユネスコ本部会議場で開かれ、その美しい響きが人々を魅了しました。この公演が大成功だった様子は二〇〇七年「夏の貴誌に渡辺健二東京藝術大学長が報告をされたのでここでは省かせていただきますが、海外における演奏会は附属高校に活気をもたらし、「世界へ羽ばたく芸高生」を合言葉に、構内から出るこのなかったオーケストラや室内楽の演奏が外に向けて発信し始めるきっかけとなりました。長野県では全校生徒で合唱付オーケストラの引越し公演をすることが出来、北京、上海（中日友好協会主催）では選抜の十四名の生徒を連れて「中日青少年交流演奏会」を行い、演奏会の最後には両国の出演者全員が参加して、「さくら」と「ジャスミンの花」を合体させた曲（高橋 裕：編曲）で会場の聴衆と、演奏した両国の生徒たちを感動の渦に巻き込みました。

附属高校では、ここ七年間、修学旅行時（二年生）に沖縄から北海道まで、地元の音楽高校と交流演奏会をおこなっており、ステージの上で演奏をし、聴衆と共に

喜びを分かち合い、音楽を通して新しい人との交わりや社会を知ることが出来る貴重な体験になっています。

こうした演奏会を開催する準備は決して楽なものではなく、生徒たちは、学校教育で定められた通常の授業数をこなさなくてはならないので、負担が大きくなることは否めません。自分の専攻実技の練習の時間をぬって行われますので、かなりのハードなスケジュールになりますが、若い彼らにとつて、演奏できる機会を得ることは何よりも嬉しく、自分たちでも計画を立て練習をしたり、協力し合い、人の意見に耳を貸し、相手を思いやることも学べるまたとない機会でもあるのです。ただ、大きな編成での移動は、楽器の運搬なども含め想像以上に経費がかかり、外部からの援助なしでは「何年かに一度」の割合でも実現は難しい状態です。しかし、二〇一一年三月、北京から十五名の音楽高校生が来日、答礼演奏会として奏楽堂で「日中青少年交流演奏会」を開催することになり、幸運にも大学側の援助を受けることが決まり、その準備が始まっております。音楽を通じて世界の人々と交流をはかり、友情をあたためることは、平山先生の唱える文化を通じての世界

略歴



粕谷 美智子
(かすや みちこ)

1966年：第35回日本音楽コンクールピアノ部門第1位
1968年：東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程修了
1972年：渡独
1976年：独シュトゥットガルト国立芸術大学演奏家コース修了
1982年～89年：同大学非常勤講師
1996年：東京藝術大学音楽学部助教授
現在：同大学音楽学部教授、及び附属音楽高等学校長

平和の実に微力ではありますが、貢献できるものと信じております。

西洋から見た東洋―二〇一二年の抱負

現在、いくつかの大学で日本美術通史と異文化交流史を指導している。美術史は近世以降の日本から輸出された漆器と陶磁器、異文化交流史はコーヒーと紅茶の伝搬史を担当している。コーヒーはエチオピアからアラビアに伝わり、大航海時代西洋に伝搬し、紅茶も雲南省に起源をもつ茶が東インド会社を経て英国に伝わり、どちらも東西の異文化交流史である。私の異文化交流への興味は父の仕事の關係で十代を海外で過ごし、東西の文化について考えたことに端を発する。

博士号を取得したオックスフォード大学オリエント研究所は、エジプト考古学の研究で知られているが、ここは東洋研究がインド研究から拡大し、中東研究と合体した。西洋人のオリエントへの興味は中東からインドへと延び、それが東洋への興味と広がっていったことが研究所の歴史からわかる。

私の指導教官であったオリヴァー・インビー博士は、英領インド・ベンガル最高裁判所所長インビー卿と妻マリーの子孫である。そのことから私は自分の専門だけでなく、東洋から東インド会社を経て輸出された美術品に興味を持つようになった。今年

は特に、日中韓のシンポジウムで西洋人は喜びを分かち合い、音楽を通して新しい人との交わりや社会を知ることが出来る貴重な体験になっています。



写真：ヨハン・ゾファニー(1733-1810)作
イライジャ・インビー(1732-1809)と妻マリア・インビー(1749-1818)の家族肖像画、1783-84 個人蔵

略歴



井谷 善恵
(いわた よしえ)

1979年：関西学院大学文学部卒業
2000年：関西学院大学大学院文学研究科修士修了（美学修士）
2001年：ロンドン大学・大学院アジア・アフリカ研究所修士 M.A. (Distinction)
2006年：オックスフォード大学オリエント研究所博士号 (Doctor of Philosophy) 取得
専門は近代輸出工芸史、異文化交流史
現在、東京藝術大学、金沢大学、多摩大学など講師を兼任

薬師寺における「日中韓芸術家交流展」と講演会・シンポジウムから



東京藝術大学美術学部 工芸科 教授

三田村有純



昨年十一月、「日中韓文化交流フォーラム」が奈良の薬師寺で開かれた。その行事の一環として同寺の「まほろば会館」にて、『似ているが違う「日本・中国・韓国」の芸術文化』展も開催され、これに伴い、日中韓の芸術家・研究者を交えた講演会・シンポジウムが行われた。



奈良・まほろば会館でのシンポジウム。左から日本・井谷善恵講師、中国・張夫也教授、韓国・周貝美教授、日本・三田村有純教授

いただくことで、美への理解を一層深めてもらうことができた。

また、講演会では、私と中国の張夫也・清華大学美術学院教授、韓国の周貝美・釜慶大学校人文社会科学研究所専任研究教授がそれぞれ自国の美をテーマに持論を展開した。私は、「日本の文化は、縄文時代（大陸から切り離され、列島になった）、平安時代（遣唐使の廃止）、江戸時代（鎖国）といった閉ざされた時代に独自の発展を遂げてきた。その美意識の特徴は、間（ま）・量（ばかし）・非対称・歪みや壊れ・うつろい・拡大と縮小の六つのキーワードで語ることができるのではないかと述べ、張教授は「中国は国土が広く、五十六もの多民族の国。中国の美を一言で説明するのは難しいが、芸術の種類を大別すると、宗教芸術・宮廷芸術・文人芸術・民間芸術・民族芸術があり、その特徴は、①写意性の重視②表現性の強調③神韻を与える④超然表現⑤多様かつ調和ということが挙げられる」と話された。周教授は「韓国の美の特徴は、柳宗悦の唱えた『悲哀の美』『白の美』とされることが多いが、それだけではなく、金属工芸や陶芸、建築などすべてのジャンルにわたり、衣食など暮らしの中

で重んじられてきた五色五法をベースにした表現がみられる。多色を用いながらも調和がある点に、豊かな韓国の自然美——とくに初秋の山々の彩りの影響を感じると語られた。続いて、井谷善恵・多摩大学講師が、ヨーロッパ人が憧れた東方とは、「日が上る国」を指し、十五世紀ごろから絵画の中に中国の磁器や日本の漆器が取り上げられている具体例を紹介。「ヨーロッパにおける東洋への憧れは、交易活動とともに、アメリカ大陸へも広がっていった」と指摘した。

その後のシンポジウムでは、井谷先生をコーディネーターに、私そして張、周の両先生が再登壇。「これからの世代は、互いの文化を尊重し、より良い方向に進んでほしい」、「これを縁に、（各国の芸術家が）会って、話して、触れ合うという機会をもっと増やしてほしい」との発言や「日本の美意識」の特徴の一つとされる「間」については、「韓国のものは、ぎっしりと埋め尽くすということにこだわっていない面がある」、「中国でも特に宮廷文化では『間』は非常に重視された。各国それぞれの考え方で『間』があるのではないかと」の発言があるなど、「根っこは同じで、違う」三カ国の文化につ

いて活発な意見が交わされた。最後に司会の漆芸家・須田賢司氏が「薬師寺のご本尊である薬師如来の台座には、東西文化交流の証が刻み込まれている。今回、薬師寺でこのような機会が持てたことを改めて意義深いことと思う」としめくくった。



展示会場には若い中学生の皆さんも……

筆者略歴

一九四九年・東京都生まれ
一九七五年・東京藝術大学大学院美術研究科漆芸専攻修了
現在 在 東京藝術大学美術学部教授、江戸時代絵巻家派十代・日展評議員、現代工芸美術家協会評議員、日本漆工協合理事、文化財漆協会常任理事

お願い

○賛助会員ご入会並びにご寄付のお願い

当財団では、財団の活動趣旨にご賛同いただき、ご支援いただける賛助会員の法人、個人の方々を募集しています。

法人正会員	年額（1口）	50万円
個人正会員	年額（1口）	1万円
維持会員	年額（1口）	10万円

財団案内および賛助会員入会申込書のご請求、その他お問い合わせは財団事務局にご連絡下さい。

○アフガニスタン文化財復興支援募金と流出文化財（文化財難民）一時保護

当財団は、アフガニスタンの文化財復興を支援するために募金を行なっております。

募金は郵便振替（00160—5—12319（公財）文化財保護・芸術研究助成財団）並びに財団宛の現金書留で受付けております。郵便振替と現金書留には「アフガン募金」と記載してください。お問い合わせは、財団事務局まで。

なお、当財団は特定公益増進法人の認定を受けており、二千元以上のご寄付並びに賛助会費は税法上の優遇措置の対象となります。

皆様のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

特報

文化財の保存修復活動への募金を目的に、財団が毎年作成しているカレンダーが、二〇一一年・第六十二回「全国カレンダー展」に入賞しました。ここに記念の品を披露させていただきます。

今月の表紙



撮影：仙波志郎

今年の題材は、徳川美術館が所蔵する国宝「源氏物語絵巻」の模写作品です。東京藝術大学の日本画第三研究室が制作したもので、高度な現状模写技術を知ることのできる素晴らしい作品を採用させていただきました。

現在、このカレンダーは、一月二十一日、二月二十三日の間、ドイツ・シュトゥットガルト市にて開催中の「GKS国際カレンダー展」に出展中です。カレンダーは、まだ残部がありますので、ご希望の場合は、財団カレンダー係までご連絡下さい。申込用紙を郵送させていただきます。尚、カレンダーは、使用後も「源氏物語絵巻」の絵画部分をはずして鑑賞することが可能です。

「安芸路」厳島神社本社本殿、平山郁夫、素描



「安芸路」厳島神社本社本殿、平山郁夫、素描

国宝にしてユネスコ世界遺産。安芸の宮島として知られる厳島神社は、瀬戸内海を池に見立て、背景の弥山を築山とする寝殿造の発想を壮大なスケールに発展させたものと言えようか。海に浮かぶ神社という特異な例は世界にも類を見ない。日本的様式美を世界に知らしめたものである。平山画伯は厳島神社は日本の美学の極致だと言いつける。ここから船で東へ進むと、ほどなく画伯の生まれ故郷である生口島にたどり着く。

PICK UP 事業

山口県下関市豊田町の「旧殿居郵便局局舎」が修復されました。大正十三年（一九二四年）に建設された大正ロマン漂う洋風建築物で、当時の郵便局長が、地元の大工棟梁を上京させ洋風建築を学び帰郷後に建築したものです。当時としては全国的に類例がなく、築後八十五年経過した現在でも当時の面影を残しています。経年により床材、柱材が腐蝕し、シンボルの八角棟屋が傾斜する等、危険な状態でしたが、再び地域住民に永く愛されるシンボリックな存在に生まれ変わりました。



編集後記

昨年は「はやぶさ」の快挙や鈴木章先生、根岸英一先生のノーベル化学賞受賞で、世界にあらためて日本の科学・技術力の高さを示すことができました。しかし、このような素晴らしい成果も、先人たちの過去の蓄積があればこそのものでしょう。東京スカイツリーの完成まで、残り一年余りとなりました。地震国でスカイツリーの倒壊を防ぐのは、五重の塔を支える日本古来の心柱の技術です。デザインを担当したのは、元・東京藝術大学学長で彫刻家の澄川喜一氏。科学技術と伝統と芸術の見事な融合です。日本に、新たな文化のページが加わりました。

新年にあたり、皆様のご多幸とご健勝を祈念いたします。本年もよろしくお願い申し上げます。

広報誌「絲綢之路」（シルクロード）

二〇一一年 新春号 通巻第六十五号

★平成二十三年一月三十一日発行
★編集発行／公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団 事務局◎
〒110-0007 東京都台東区上野公園十二一五十
電話 〇三（五）六八五二二二一
FAX 〇三（五）六八五二二二五
URL: http://www.bunkazai.or.jp/
E-mail: jfmkyoku@bunkazai.or.jp
★印刷 株式会社 東都工芸印刷